

発生的現象学からみた構成の問題

山口 一郎

フッサールの構成の概念は、『イデー I』で次のように明確に記述されている。「最も重要な問題は、意識対象性(Bewußtseinsgegenständlichkeiten)の構成の問題である。この問題は、例えば、自然に関していえば、素材的なものを活生化し、多様で統一的な持続体と総合を組成しつつ、諸ノエシスが何かについての意識をもたらし、対象性の客観的統一がそこにおいて斉一的に<証示>し、<証明>し、<理性的>に規定しうるかというそのあり方に関わる」¹と述べられている。ここでいう「素材的なもの(das Stoffliche)とは、「素材的体験」とか、「ヒュレー的なもの(das Hyletische)」ないし、「実有的存続体(reelles Bestandstück)」といわれるものであり、それ自身の内にかなる構成的契機も含んでいないと規定されている。この素材的なものは、ノエシスを通してはじめて、「超越論的に構成されたもの」になるのだ。こうしてここで、「ヒュレー—ノエシス—ノエマ」という構成概念の骨格が明示されている。したがって、構成の問題系とは、ノエシスとノエマの間の志向的相関関係の問題にかかわるだけであるようにみえる。超越論的構成は、こうして、素材的体験を基礎にして、ノエシスの作用を通して構成体を構成するのだという規定が成り立つ²。このように理解された相関関係のアプリオリの構成分析こそ、フッサール現象学の決定的に重要な探求領域を形成しているとされるのである³。

しかしながら、フッサールのいう「ヒュレー的なもの」とは、統握作用のために単に作用を受ける感覚素材を提供するだけの意味を持つのではないことが、構成分析そのものを通して次第に明確になってくる。その際、まず重要な点は、このフッサールのヒュレー的なものを、それが、志向的性格を欠くことから、ヒュームのいう「印象」と誤解してはならないことである。実は、このヒュレー的なものは、先の規定にもかかわらず、分析の進展につれ、内に構成的契機を含むものであることが明確になってくる。この構成的契機は、まずもって、『内的時間意識の現象学』における過去把持という「特有な志向性」として表現され、後に、『受動的総合の分析』において受動的総合として表現されてくるものである。

したがって、この特有の「ヒュレー的構成」がいかなる構成のされ方をなしているのかは、内的時間意識の構成分析と、この時間意識を時間内容をも包含する具体

¹ E. Husserl, Hua. III, S.212.

² Ibid., S.244f.

³ Vgl. E. Husserl, Hua. VI., S.169, Anm. 1.

的な生き生きした時間化の分析、より深化した時間分析となっている受動的総合の分析とを通して初めて、十分に解明されるものなのである。以下、本稿において、この解明を通して、超越論的主観性の最も根源的な構成層とは、「先一構成」という構成層であり、間モナド的な絶対的時間化のヒュレー的で原発的な衝動的志向性の自己構成であることが判明するはずである。

間モナド的時間化の分析に向かう前に、まずは、『イデー』期の構成論が『イデー II』で展開されていることを確認しておかねばならない。フッサールは「ヒュレーノエシスノエマ」という構成の基本原則に即して、『イデー II』において領域的存在論を展開する。この構成論に即して、すべての対象的領域が、自然の層から、精神の層に向けて、階層的に記述されている⁴。その際、事物、空間幻像 (Raumphantom)、感覚素材、身体、心、純粹自我、人格等々という基本諸概念の形式的本質論と質料の本質論が展開されており、根本的規則性としての「因果性」と「動機」が決定的な役割を果たしている。このような本質連関の構成分析は、層構造において遂行されており、この層構造の分析は、後に「静態的現象学」の分析と名づけられ、「発生的構成分析」の導きの糸となるものである。

1. 時間の構成と受動性の構成

『イデー II』でみられる、超越論的に構成された諸層全体に渡って構成分析を一貫する試みは、一つの、非常に重要で、解明困難な問題にぶつかる。その問題とは、時間構成に際して、時間の持続の意識を、ヒュレー的契機とノエシスの統握作用の関係による「統握作用と統握内容」という図式では、分析解明できないという問題である。彼は、「ヒュレーノエシスノエマ」の図式で、持続という時間意識の構成を説明しようとして、過去把持的な射映に与えられているヒュレー的なものをノエシスが統握して、持続の意識が構成されると理解しようとした。もちろん、出発点は、各自に与えられている持続の意識そのもの、例えば、「鐘の音が鳴る」ときの音が鳴っているという持続の意識に他ならない。この与えられているがままの音の持続は、認識論的にどう解明されるのかという問いである。

上記のように音の持続の意識を統握図式で説明しようとするとき、つまり、この意識現象に認識論的な根拠を与えようとするとき、フッサールは、「無限遡及」の問題にぶつかる。なぜなら、あらゆる意識内容が、この図式に即していえば、統握と

⁴ Vgl. E. Husserl, Hua. III, S.364.

いう意識作用によって構成され、構成されたものとして意識されるとするのであれば、「すぐに持ち上がる問いは、この統握作用が意識されているその意識への問いである。というのも、この統握作用そのものが一つの〔意識〕内容であるからである。そして、無限遡及が避けられなくなる」⁵というのだ。ここで何がいわれているのかを理解する際、このテキストから読み取れるように、ノエシスとしての統握作用は、それとして意識されている、意識内容になっているという点が決定的に重要な論点である。統握作用が働くとき、それは、それとして意識されている。だからこそ、この統握作用の働きの意識内容を構成する別の統握作用が問われねばならなくなるのである。この点は、他のテキストでも、「すべての作用は、何かについての意識であるが、すべての作用は意識されてもいる。すべての体験は“感覚されていて”、内在的に“知覚されている”（内的意識）。もちろんそれは、措定されているのでもなければ、思念されているのでもないのだが（知覚とはここで、思念し—対向—されているのではなく、また把握されているのでもない）」⁶というように明記されている。

統握作用そのものが意識されている。しかし、この統握作用の意識という意識が作用としての何かについての意識であるのならば、つまり、通常の志向性の性格をもち、思念しているのであれば、そのような何かについての意識は、意識されているのである以上、その意識を構成する別の意識によって構成されているのだから、そのような別の意識が要請されることになってしまう、というのだ。この無限遡及は、直接所与されている持続の意識にそぐわない。持続の意識は、直裁に、直証的にあたえられており、このような論理的帰結、すんわち、無限の意識作用の系列を内に含んでいるようには与えられていない。直証的に与えられている現象の成り立ちを問うのに、この統握図式では、その成り立ちを問うことができない、ということが、無限遡及という問題が指摘していることに他ならず、図式の不適切性を示唆し、他の理解の仕方を要請していることに他ならないのだ。そして、それが、上の引用にあるような、措定ではない、思念ではない、志向性とはいえない、内的意識によって意識されるという、特有な意識なのである。

したがって、無限遡及の問題は、決して概念操作による論理上の問題なのではない。また、志向性の論理に含まれている内的矛盾などといった問題なのではなく、直観内容の記述の適切さ、不適切さの問題であり、現象学的分析の可能性の問題で

⁵ E. Husserl, Hua. X, S.119.

⁶ Ibid., S.126.

ある。

時間の持続の直観的所与には、そのような無限遡及のプロセスは含まれていない。フッサールはこの問題を内的意識、ならびに、絶対的時間流と過去把持の自己構成の記述を通して解決できるとしている。この自己構成において、あらゆる意識内容は、それ自身において、必然的に「原意識されている」⁷というのだ。絶対的時間流の次元では、「構成するものと構成されるもの」⁸とが一つである。この逆説的な自己構成の内実は、過去把持的志向性の二重性を意味している。その際、特に重要なのは、過去把持の「縦の志向性」であり、「それは、流れの経過の中で、自己自身との絶えざる合致統一においてある。」⁹というように、絶対的時間流の自己一致は、過去把持の縦の志向性において確証されているのである。そして、この合致統一こそ、20年代に本格的に分析、展開される受動的総合として定題化されるものに他ならない。『時間講義』から『受動的総合の分析』に向かう時間分析の深化とは、過去把持の縦の志向性における時間内容の自己構成の分析上の進展を意味する。受動的総合の場合、いなかると自我の活動も伴うことなく、総合が生起していると記述されるが、これこそ、先に通常の思念、何かについての意識という通常の志向性の規定の枠から外れた次元で生じている受動的志向性のもつ、先に「特有な志向性」と名づけられて働きを意味しているのである。

興味深いことは、近年刊行された『ベルナウアー時間草稿』の中で、フッサールは、この無限遡及の問題に再度、徹底して取り組んでいることである。そこでは、問題解決の一方向は、「すべての注意を込めた把握が支配する以前の原プロセス」¹⁰に求められる。この原プロセスにおいては、すべての統握および、準現前化は、働いておらず、この原プロセスは、内容的には、先に述べた過去把持の縦の志向性、ないし受動的総合と次元を共有するといえる。しかも、フッサールは、この次元に、すなわち、原プロセスの内在的時間秩序において、感覚素材と感性的感情および衝動を抽出している。これらは、自我を触発する「受動的志向性」¹¹と名づけられているのである。20年代の受動的総合がフルに展開する以前の1917年、18年の草稿に受動的志向性、衝動志向性、触発といった根本原理が準備されていることは、明記されておかねばならない。

これまでの記述で明らかのように、過去把持を通常の統握に順する志向性とみな

⁷ Ibid., S.119.

⁸ Ibid., S.83.

⁹ Ibid., S.81.

¹⁰ E. Husserl, Hua. XXXIII, S.244f.

¹¹ Ibid., S.276.

すことはできないことを、再度強調せねばならない。過去把持は、受動的志向性なのであり、その縦の受動的志向性において、時間内容の受動的綜合が生起しているのである。そこに、自我の活動はいかなる関与もみせてはいない。

このことを前提にする触発の理解が決定的に重要であり、触発は、受動的構成の領域に属し、時間的なものを構成する体験の持続性の受動的綜合を通して、生起しており、この体験の持続性は、「逆説的にも、自己を時間的に構成し、知覚に即して意識されている。」¹²のである。そして、その重要性を加味して、前もって言及しておきたいのは、受動的構成と通常構成と規定されてきた能動的構成（統握作用による構成）との基づけ関係である。フッサールは、明確に、すべての能動性の構築は、「必然的に、最低層としてあらかじめ与える受動性を前提しており、これを追跡していくと、受動的発生による構成に行き当たる」¹³と述べている。

2. 静態的構成と発生的「先一構成」

時間構成の分析は、このようにして、受動的構成の次元を開示しており、さらに、静態的構成と、時間と連合をめぐる発生的構成との違いの問題領域にわれわれを導くことになる。本質規則性の一つである時間を構成する意識の形相的構造は、フッサールによると、「意識発生(Bewusstseinsgenesis)の、そして同時に、対象性の根源的構成としての発生の、即自的に第一の最も深い規則性である」¹⁴。しかし、ここで注意しなければならないのは、時間構成の構造的形式と、時間構成の対象性の有する時間内容とは、その根源的な発生においては、不可分離であることである。だからこそ、フッサールは、時間意識を、時間内容を規定する連合の概念を用いて、「原連合的」と名づけるのである。発生的現象学において、時間形式と時間内容が不可分離なことは、徹底して理解されねばならない。

この不可分離性は、発生的構成の方法論において、次のように明示されている。静態的分析は、本質直観によって獲得された本質規則性を解明する。先に述べられた「時間意識の形相的構造」がこの本質規則性に属する。そして、この本質規則性が、脱構築の方法を通してその発生的秩序に関して、ある特定の構成層が他の構成層に時間的に先行せねばならないか、あるいは、先行しないかと、問われる。1930

¹² Ibid., S. 361

¹³ E. Husserl, *Cartesianische Meditationen*, F.Meiner, 1977, S.81. 邦語訳(浜渦辰二訳)143頁。

¹⁴ E. Husserl, *Hua*. XXXIII, S.281.

年代、この絶えざる遡及的問いを通して、フッサールは、自我の構造に先行する、徹底して「先-自我的」な原流れ(Urstrom)に到達する。「原初的現在の構造分析(立ち留まる生き生きした流れ)は、われわれを、自我の構造と、その構造を基づける絶えざる、自我を欠く流れの低層へと導く。この流れは、徹底的に先-自我的なものへと、一貫した遡及的問いを通して遡及的に導いている」¹⁵。ここで述べられている「一貫した遡及的問い」とは、発生的問い、発生的方法に他ならない。様々な本質規則性、ここでいえば、時間構成の本質規則性を、その基づけ関係に即して、問い詰め、最終的に露呈されたのが、「徹底的に先-自我的原流れ」なのである。ここで語られているのは、

- 1) 時間構成の問題は、本質規則性としての時間形式の解明にとどまるのではないこと。発生的現象学で進展をみせる時間構成の分析は、発生の原理とされる、時間と連合、原連合ときていされる時間構成の分析であって、けっして、本質規則性にさらなる抽象を施し、本質規則性相互の単なる形式的な時間秩序を問うのではないこと。
- 2) 先-自我的原流れが自我の構造を基づけているのであり、その逆ではないこと。自我の構造は、作動する自我(das fungierende Ich)を前提にする。作動する自我なしに自我の構造を考えるのは、不可能である。自我極も当然、自我の構造に含まれる。受動性とは、まさに「自我を欠く」ことであり、「作動する自我を欠く」ということである。したがって、作動する自我とその自我の構造からフッサールの「生き生きした現在」を解釈する試みは、「先-自我的原流れ」の主張に矛盾するといわねばならない。
- 3) 構造を流れが基づけるといふとき、絶対的時間流の自己構成が、時間形式と時間内容を同時に構成していることを意味するに他ならない。形式と内容が同時成立する自己構成において、「それでも時間は形式だ」と主張することにはいかなる意味があるのか。それは、単なる抽象による主張に他ならず、脱構築は、単なる抽象ではない。構成層の基づけ関係を問うとは、志向性の相関関係を意味する構成の層を構成層ごとに問うのであり、意識作用を形式的規則性として抽出して、その時間秩序を問うのではない。
- 4) したがって、「自我の構造を基づける」とは、自我の構成層を基づけることであり、自我の構造と同時に自我の作動をも基づけるということの意味する。先に

¹⁵ E. Husserl, *Hua. XV.*, S.598. このテキストは、ランドグレーベが、「目的論と身体性の問題」(B.ヴァルデンフェルス他編、『現象学とマルクス主義 II.方法と認識』、邦語訳、304頁)において引用しているテキストである。

言及された「受動性が能動性を基づける」という基礎原理がこの主張に対応している。文頭にある「原初的現在の構造分析（立ち留まる生き生きした流れ）」とは、時間形式の形式上の分析を意味するのではなく、構造を構造として成立させている働きを含めた、構成分析を意味する。いうまでもないことであるが、先—自我的流れとは、単なる形式を意味するのではない。

この「徹底的に先—自我的なもの」の露呈にあたって、同時に開けてきた次元は、「先—自我」、「先—存在」、「先—世界」、「先—時間」¹⁶そして、「先—構成」¹⁷といわれる次元である。この「先」という接頭辞の持つ意味を軽視することは、フッサールの構成論における受動性の役割を軽視することには他ならない。受動性が能動性を基づけるといふ「基づけ関係」の原理を重視しないことに他ならない。「先—構成」が「構成」を基づけるといふフッサールの構成論の主張を真に受けないに等しい。

受動的志向性は、いずれ、能動的志向性に転化する前段階を意味するのではない。このことを確証しうるにたる確証は、現在と過去の相互覚起という時間構成論、受動的総合として対化(Paarung)が間主観性を基づけており、言語によるコミュニケーションは、この受動的総合の働きを前提せずには、そもそもその構成能作が機能しえないこと、また、個別的事例ではあるが、本能的キネステーゼが働いて初めて能動的キネステーゼ（自我の活動を伴うキネステーゼ）の構成能作が働きだす、等々、発生的現象学が開示した例証は挙げ尽くすことができない。この「挙げ尽くすことができない」のは、受動性が能動性を基づける基づけ関係がすべての現出の普遍的原理であることを意味するに他ならないからである。

また、受動的構成が能動的構成の単なる前段階なのではないことは、受動的総合は、カントの「生産的構想力」に対応するということができて、悟性のカテゴリーを密かに感性の領域に潜入させ、感性の総合の名目で活用しているのではない、ということからも明白である。フッサールは、『受動的総合の分析』において、カントの「超越論的演繹論」に言及して、カントは空間世界的対象性の構成という高次の層の問題を目にしただけであり、より根底的低層に存在する内的世界の構成の問題、すなわち、「体験流の構成の問題」を見過ごしてしまったと批判している¹⁸。つまり、空間世界の構成は、内在に働く総合によってのみ同一の存在であることが確

¹⁶ Vgl. E. Husserl, Hua. XV, S.597.

¹⁷ Ibid., S.173.

¹⁸ E.フッサール『受動的総合の分析』、邦語訳、183頁及び次頁を参照。また、Hua. XI, S.275以降では、明確に、生産的構想力の総合は、「われわれの理解では、われわれが受動的構成と名づけるものにほかならない」が、「カントは、受動的生産の本質を志向的構成と認識することはできなかった」と批判している。

証されるのであり、この総合は、「超越論的時間総合を超えてゆく内容に関する総合」¹⁹としての受動的総合に他ならないのである。ということは、受動的総合の分析とは、時間内要を含む体験流の分析を意味し、この体験流の分析は、カントのいう感性の形式としての時間の分析では到達しえない領域の分析であることを意味している。しかも、カントの場合、現象の多様性が統一にもたらされる可能性の条件としての「自我の超越論的統覚」²⁰が立てられるが、受動的総合の統一は、自我の超越論的統覚以前に生じる超越論的規則性としての「連合と触発」によって生成している。当然ながら、カントのカテゴリーの適用は、この統覚を前提にしており、受動的総合が密かなカテゴリーの援用でないことは、このような統覚の働き出す以前の領域において受動的総合が働いていることから明白である。

触発は、自我に向けての触発であるが、「対向」とは異なり、自我の活動ではなく、自我の活動を伴わない受動的総合に属する。「自我に向けて」というとき、自我を論理的に前提にしているという形式論理的主張は、「超越論的な内的生の統一についての普遍的な構造規則性、および発生に関する普遍的規則性」²¹を解明する「論理の発生論(Genealogie der Logik)」の探求領域を理解しえない主張であり、「論理的な明証化の能力」を不明のままにしておく論理学の立場として、「絶望的な不明瞭さとどまる」²²というフッサールの批判を受けねばならないだろう。自我の関与による、能動性と受動性の関係の次元と受動性の発生の次元とが、常に明確に区別されていることを見落としてはならず²³、能動性は、自我極から由来しているのであり、自我が触発されるとは、「まえて、自我が支配していない受動的志向性が自己自身の内に対象を構成している」²⁴、そのような触発的综合による触発的力が、自我極を触

¹⁹ 同上、184頁。

²⁰ 周知のように、フッサールは『危機書』において、カントの「物自体」と「自我の超越論的統覚」形而上学的構築物として批判し、「カントのすべての超越論的概念、自我の超越論的統覚の概念、様々な超越論的能力の概念、“物自体”(物と心の根底に位置するとされる)の概念は、構築的諸概念であり、究極的な解明に原理的に抵抗する諸概念である。」(Hua, VI, S.203)と明言している。

²¹ 同上、107頁。

²² 同上、同頁。ここには、さらに、「この中心的な課題〔論理的な明証化の解明〕を前にして無能でないようにと思えば、まず第一に、すべての能動的な確証の根底にある受動的な確証綜合の基底層を解明しなければならない。」と明確に述べられている。受動的な確証綜合こそ、『受動的総合の分析』の中心テーマであり、自我の関与なしの確証綜合が解明されているのである。

²³ このような記述は、枚挙にいとまがないが、例えば、『受動的総合の分析』、邦語訳、326頁参照。

²⁴ Hua, IX, S.209. なお、触発と自我極の関係について、拙論『汝の現象学に向けて』(近刊)、第2節を参照。

発するということを意味するのである。

この発生的現象学の遡及的問いを通して露呈された先-自我的原流れの領域は、間モナド的時間化の領域として明示されている。この次元の根源的時間化は、伝統的な、形而上学規定としてのすべての二元性、すなわち、本質/事実、形式/内容、内/外、主観/客観等によっては、把握不可能である。これらの二元性そのものがそこを起源にするからこそ、この時間化は、絶対的といわれ、「絶対的時間化」²⁵と名づけられるのである。しかもこの絶対的時間化は、それ自身、いわゆる「超越論的事実性」として現出しており、この超越論的事実性の自己構成は、ヒュレー的構成が生じる、受動的先-構成を意味するに他ならない。超越論的事実性の自己構成は、絶対的時間化として生起しており、その生起は、間モナド的に本能的志向性と衝動的志向性をその先-構成の基礎原理として、先-自我的原流れを流れている。

3. 本能的-間モナド的時間化の先-構成と人格的-間モナド的時間化の構成

絶対的時間化は、間モナド的時間化である²⁶。間モナド的時間化は、能動性が受動性によって基づけられているという根本原則に即して、受動性と能動性の層構造をなしている。受動的な間モナド的時間化は、「本能的-間モナド的」と名づけられる。第一次的で原初的な生き生きした現在において、諸モナドは、「全モナドの絶対的同時性において、諸々の衝動が直接的ないし、間接的に相互に超越することを通して」²⁷共同化されている。換言すると、モナドの全性は、「根源的に本能的な交通」において生じているのである。

この受動的「間モナド性」を理解する上で、重要なのは、モナドの個別化(Individualisierung)を間モナド性の「間(inter-, das Zwischen)」²⁸の持つ原理的意味から適切に理解せねばならないことである。「間」というのは、構成されたものとしての個別項を前提にして生じるのではなく、逆に、先-構成される受動的発生という関係性そのものが先行し、その中から、個別項が成立するのである。本能志向性による先-構成が働く中での先-構成されている、「先-存在」としての個別性と、自我の活動を前提にする構成が働き、そのように構成されたものとしての個別性とを混同してはならない。

²⁵ E. Husserl, Hua. XV, S.670.

²⁶ Vgl. ibid., S.,337.

²⁷ Ibid., S.595.

²⁸ この「間」の原理が現象学研究で展開されてきた経緯を振り返る記述として、B.

この点は、フッサールが沈殿(Sedimentierung)の概念を適用して、モナドの歴史性を問題にする次の記述の解釈にも妥当する。「1) 根源的な本能的交通における諸モナドの全性、諸モナドはその個別的生をたえず生きつつ、かくして、諸モナドは、沈殿した生を伴い、隠れた歴史を伴い、その歴史は同時に“普遍史”を含蓄する。眠れるモナド。2) モナド的歴史の発展、覚醒する諸モナドと絶えざる基づけとしての眠れるモナドの背景を伴う覚醒における発展。3) 世界を構成しつつ、世界の中に自己客体化へと方向づけられた形式内のモナドの宇宙に一貫する人間のモナドの発展、理性的な自己意識と人間性の意識、並びに世界理解へと至る諸モナド、等々」

29

この1)で述べられている「個別的生」の「個別性」とは、当然ながら、自我の個別性を意味するのではない。本能的交通を生きる眠れるモナドは、覚醒するモナドを基づけつつ、超越論的独我論の根底の更に下層を生き、その根底を底ざらいし、独我論の根はこの下層に届いていない。このような眠れるモナドの個別的生は、先一構成としての個別性であり、しかも、「隠れた歴史」の沈殿をにない個別性なのである。この個別性は、覚醒した人間のモナドの個我としての個別性と混同してはならないのである。

間主観性の構成は、一方で、本能的な間モナド的時間化の基底層において受動的に構成されているが、他方、人格的態度における「我と汝の合致」の次元において、能動的構成の頂点に達する。先の引用の3)の次元に対応するのが、この人格的態度における「我と汝の合致」の領域であり、そこで人格的一間モナド的時間化における間主観性が成立する。

そこでは、愛する人格間の融合が問題とされる。ともに生きるという意志が共有されるなかで、互いの人格性を完全に受容し、互いを本当に了解しつつ、相互の「意志の生の総体性」を生きる。「意志の性の総体性に関係づけられた人格性——かくして自我の存在のその総体性に関係づけられた人格性。愛において、一方からの、ないし相互の愛において相互の“合致”、諸人格の融合」³⁰が成立する。しかしながら、この人格間の合致、ないし、融合の分析は、フッサールにあっては、原理的な領野の開示はなされていても、分析そのものは、十全とはいいがたく、「我—汝—関係」の現象学については、稿を改める必要がある³¹。

Waldenfles の近著 *Bruchlinien der Erfahrung*, 2002, S.173f. を参照。

²⁹ Hua. XV, S.609.

³⁰ 同上、598 頁以降を参照。

³¹ このテーマについては、拙稿『汝の現象学に向けて』(近刊) および、教授資格論文: *Ki als*

しかし、いずれにしても、超越論的独我論は、二方向において完全に克服されているということ是可以する。すなわち、受動性による「先—構成」という根底の方向と最高次の能動的間主観性が実現する理性の目的論の方向の二方向である。フッサールの志向性の相関関係の分析と構成分析は、このような理性の目的論において、その組織的な連関にもたらされているのである。

leibhaftige Vernunft, 1997 を参照。